

## 時間的な変化の意味

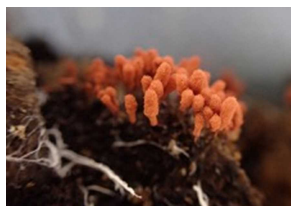
### 1. 粘菌と変形菌

生物を分類するとき、菌類、植物、動物などと分けますが、粘菌と変形菌はいずれにも入らない変わり者です。変形体と呼ばれる時期があり、アメーバのように動き回ります。大きくなると10 cm以上にもなり目につくようになります。湿った落ち葉や石の表裏、朽ちた幹などで見かけることがあります。網の目のようになっていますので、知らないときキノコの菌糸と思って見過ごして

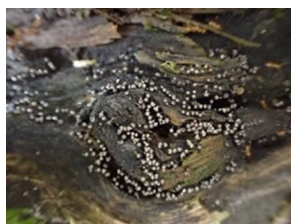


変形体

しまいます。形を自由に変えますので変形体ですが、粘菌の変形体は1個の核を持った細胞の集合であり、変形菌の場合は、細胞の中で核分裂だけが繰り返された多核の1個の細胞です。しかし、粘菌と変形菌を同一のグループとして呼んでいることも多いようです。打吹山では雨の多い6、7、9月、樹林の中の湿った場所が探し目です。



ウツボホコリの子実体



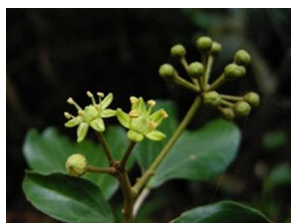
タマホコリの子実体

変形体は細菌や微生物を食べて成長するのですが、ある時期になると1個体の変形体が多数の小さいキノコあるいはカビの胞子嚢のような姿に変身します。胞子を作る子実体と呼ばれるもので、かたくなり形は変わらなくなります。胞子が成熟すると埃のように胞子を飛ばしますので、△△ホコリカビというような種名を付けられているものがあります。子実体を目にして

いる機会は多いかもしれませんが、倒木やコケなどの表面についているカビやキノコと思って見過ごされていると思われるかもしれません。このように栄養成長期と繁殖期でがらりと体制を変化せる生きもののしくみは生命科学最先端の研究材料となっています。

### 2. キヅタの花

ツタのように茎から出した気根で付着しながら樹幹や崖を這い上るのですが、より樹木っぽいために「木」がつけられたのでしょう。ツタはブドウ科ですが、キヅタはウコギ科です。ウドやヤツデと同じ科ですので果実も似ています。常緑性ですので、フユツタとも呼ばれ、観葉植物のアイビー(Ivy)も外国のキヅタです。



右上：蕾 中：雄性期  
左下：雌性期

キヅタは秋遅く開花し、翌年初夏に種子が成熟します。花はヤツデのような塊(散形花序)を数個、枝の先端につけます。周辺の蕾から開花していき中心に位置するものほど遅くなります。個々の花は大きくないのですが、周辺の5枚の花弁と5本のおしべが目立ちます。1週間ほどすると花弁とおしべは脱落し、中心のめしべの柱頭が開きます。おしべが存在している時期にはめしべは受粉しません。雌雄の熟期を変えることで自家受粉を防いでいるのだと考えられます。

気温の下がる秋の開花では、主要な花粉の運搬者である昆虫が少なくなっています。どのような種が花に来ているか観察すると、成虫で越冬するスズメバチやアシナガバチ、アブ、ガが見られます。彼らへの代償は蜜です。雄性期、雌性期を通して蜜を出さなくてはめしべに花粉を運んでくれません。代償は大きいようです。しかし、キヅタが秋を選んだのには理由があります。理由については別の月に。



訪花したシマハナアブ